



子ども理解の道しるべとなるもの

子どもの姿の奥にある願いや葛藤に心を寄せる



## 子ども理解に基づいた授業実践研究 ～“発達の視点”と“教師間の対話”を授業づくりの柱として～

国立大学法人  
滋賀大学教育学部附属特別支援学校

研究年報の刊行によせて

本校では“教師間の対話”に基づく子ども理解に根ざした授業実践研究を積み重ねています。今年度は、子どもへの支援や関わり方の道しるべとして“発達の視点”に立ち返り、ケーススタディをもとに「理論と実践の往還」を図るとともに、子（個）から学び合う教師集団づくりにも取り組みました。その過程において、多くの先生方からご指導とご鞭撻を賜り、研究の基本的な考え方とスタイルを形作ることができました。コロナ禍だからこそ子ども一人一人と向き合い、体験や活動の意味を問い直すこともできました。

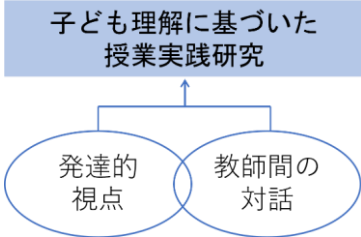
『令和の日本型学校教育』の構築を目指して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の具体的な実践化が求められています。ここに本校の研究成果を広く公表し、皆様からのご批評を仰ぎ、今後さらに発展させていくことができるよう努めてまいります。どうぞ忌憚のないご意見やご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年（2023年）3月  
滋賀大学教育学部附属特別支援学校 校長 辻 延浩

# テーマ設定理由

本校では、平成30年度より授業づくりをテーマに研究を進めている。昨年度は、「対話を通して学び深める授業づくり～「なりたい自分」になるために～」をテーマとし、自己実現に向かう力を育むために、各発達段階における対話的な学びの特徴を活かした授業づくりについて研究してきた。昨年度の成果として、教師間の対話をベースとした授業づくりの手法（アイデアシェアタイムなど）は、授業力向上のために有効な手段になることが明らかになった。一方で、子どもの「なりたい自分」を深く捉えるためには、発達の視点が必要であり、発達の視点を通じた授業のあり方についてさらに深めていくことが課題とされた。今年度の研究では、引き続き子ども理解に基づいた授業実践研究に主眼を置き、昨年度の課題である“発達の視点”を深めること、そして研究の成果である“教師間の対話”を融合させながら、授業力の向上を図ることを研究の目的とした。

教育には“不易と流行”がある。中でも本校の研究は「時代を超えても変わらない価値のあるもの」（不易）、それは発達の視点や教師間の対話を軸に据えた授業実践研究の蓄積であると捉え、今一度、特別支援学校の授業づくりのあり方について検証するものである。特に「発達の視点」についての知見を深めることは、ICT教育など新たに求められる教育活動においても必要不可欠であり、特別支援学校における子ども理解や授業づくりの礎となるものであるという思いから、本研究のテーマを設定するに至った。



## 研究の目的

- (1) 発達の視点を柱にした授業づくりのあり方について明らかにする。
- (2) 教師間の対話を軸にした授業実践研究を通して、教師集団としての授業力向上を図る。

## 研究の方法

### 【1. 発達の視点について】

(1) 発達の視点を学ぶ  
滋賀大学障害児教育コースの先生に研修を依頼し、「発達に関する研修会」を年に3回実施。各学部で選定したケース生の発達検査を実施し、検査の様子や見立てから発達の視点を学ぶ。各学部のケース生は以下のように選定する。

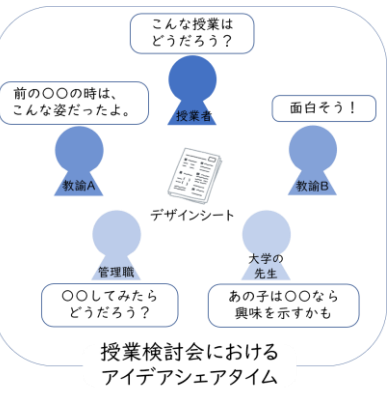
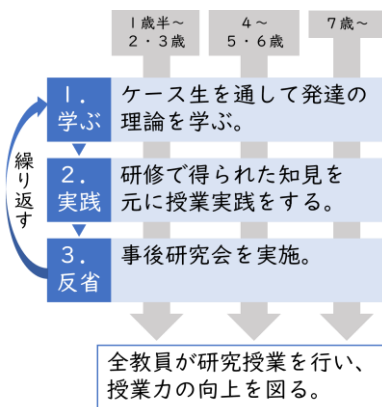
小学部 1歳半～2・3歳	中学部 4～5・6歳	高等部 7歳以降
-----------------	---------------	-------------



(2) 授業実践を行う  
「発達に関する研修会」で得られた知見を元に授業を立案し、実践する。授業づくりの際にアイデアシェアタイムなどの“教師間の対話”を取り入れながら、授業観、子ども観を広げ、児童生徒の願いや発達要求に応える授業実践を積み重ねていく。

(3) 事後研究会を実施する  
授業実践後に事後研究会を実施する。授業動画を見ながら、小グループを作り、授業の振り返りを行う。検討会の最後に大学の先生から講評をして頂く。

(4) 学んだことを言語化する  
教員アンケートをもとに研究を振り返り、発達の視点を柱にした授業づくりのあり方について明らかにする。



### 【2. 教師間の対話について】

① デザインシートとアイデアシェアタイムの活用  
授業づくりの過程を教師間で共有するツールとして「デザインシート」を活用する。また、授業検討会では、アイデアシェアタイムを設けて、教師間で授業のねらいや教材の選定など意見交換をしてから、授業実践を行う。

② 対話タイムと事後アンケートの共有  
研修や事後研究会の時には、「対話タイム」を作り、考えを共有する機会を設ける。研修後には、アンケートを全校の教員で共有することで、教師間の価値観や考え方の違いも含めて理解し、自身の授業観や子ども観について、幅広い視点が持てるようにする。

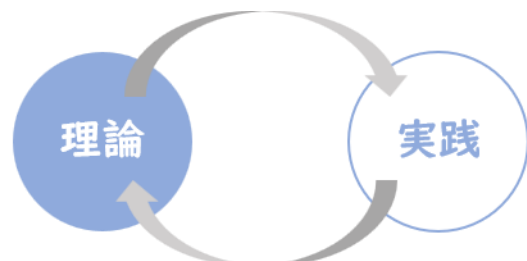
**発達の視点を学び、教師間の対話において子どもの姿や授業を語り合い、子どもの願いを捉えた授業実践につなげていく**



# 令和4年度 研究のポイント①

## 理論と実践をつなぐ ～ケース生を手がかりにして～

発達の視点について理解を深め、自らの子ども理解や授業実践に活かしていくことを研究のポイントとした。そのために、研究の方法(1)における「発達に関する研修会」では、発達の理論について、教授してもらうだけでなく、ケース生を設定し、ケース生の実際の姿を交えながら、発達の視点について学びを深めた。ケース生については、発達検査の見立てだけでなく、過去の担任からケース生に関するエピソードを集め、ケース生の“今”だけでなく、これまでの生活史や育ちの部分にも焦点を当て、子どもを発達的に捉えることを学んだ。ケース生を手がかりにして、具体的な子どもの姿をイメージし、教師自身が実感を持ちながら発達の視点についての学びを深めることを大切にした。



発達の理論や特徴  
発達検査の様子・見立て  
ケース生の生活史や育ち

学びを授業づくりへ活かす  
授業記録の蓄積  
授業の振り返り、対話



“個”から学んだことを他の子ども理解や授業づくりに生かす

また、事後研究会に大学の先生に助言者として参加してもらい、授業の講評をして頂いた。研修、授業実践、振り返りを丁寧に行う中で、発達の視点の理論を学ぶだけでなく、理論と実践を結び付け、またそれらを教師自身の中で往還させていくことを大切に。ケース生を手がかりとしながら、一人の“個”に深く関心を寄せ、“個”から学んだことを他の子ども理解や授業づくりに活かしながら、発達の視点についての理解を深めていく研究とした。

# 令和4年度 研究のポイント②

## デザインシートの活用 ～授業づくりの過程・振り返りを共有するツールとして～

前年度の研究から活用している「デザインシート」の様式を変更し、授業の構想段階の“過程”から授業実践後の“振り返り”までを共有できる一枚のシートに様式を変更した。

授業力の向上を図るためには、自ら授業を振り返り、考えを言語化し、教師集団で共有、議論していく必要があるという思いから、この「デザインシート」を活用して、アイデアシェアタイムや事後研究会を行った。また、上記の研究のポイント①で取り上げた視点を大切に、ケース生に関する項目を設け、発達の視点を意識して、授業づくりが行えるようにした。

この「デザインシート」を活用することで、限られた時間の中でも、授業づくりの過程、そして授業の様子、振り返りなどが共有しやすくなり、アイデアシェアタイムや事後研究会において教師間の対話を深めるきっかけになるものと考えた。また、授業者が自身の授業を省察するためのツールになるものでもあり、授業づくりから実践までの一連の過程を俯瞰的に捉え、自らの考えを整理したり、課題を捉えたりすることで、これからの授業実践につなげていくものになると考えた。

新単元デザインシートは本校HPに掲載しています。是非ご活用ください。→



### 単元デザインシート 2022年度

学年	小学部	教科	ことばかず	対象	ことばかずグループ	人数	5人
					漢字程度	人数	徳永孝司

① まずは集団としての視点で、年間目標シート

② それならこんな活動はどうだろう?

③ もらった意見をふまえて、この活動に

④ 実践報告の後に、出た意見やふりかえり

⑤ 実践報告をうけて、ふりかえり

⑥ 活動の振り返り

ケース生に視点をつけてみよう。

発達検査の様子・見立て

授業実践の様子

振り返り

振り返り

振り返り

**発達の視点を意識した授業づくりに活用**

**授業検討会でのプロセスの共有に活用**

**授業者自身の振り返りに活用**



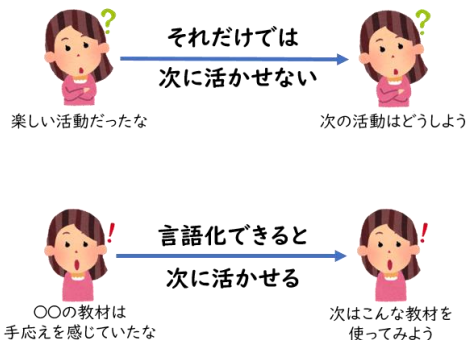
絵本「きょうだいなきだいな」 わらべ歌「あがりめきがりめ」 わらべ歌「かめかめめ」

【1. 発達の視点について】

(1) ケース生からの学び

事後の教員へのアンケートでは、(以下、「」はアンケートの引用)「本校の実際の子どもの様子とリンクして、話してもらうことで理解しやすかった」「発達の捉えることを本校の生徒の実際の様子を通して学べた。発達の捉えを言語化することを学びあえた」という意見があり、ケース生の姿に思いを馳せ、実感を持ちながら学びを深めることができた。また、子どもの姿や行動の背景となるものを想像し、それらを発達の視点でくぐらせ“言語化”することは、教師の子ども理解をより深め、日々の子どもの小さな変化を捉える力につながる。ケース生を手がかりにして発達の視点を深めていくことは、発達の視点を実際の子どもの理解や授業実践につないでいくための契機となった。

一方で、今回はケース生を取り上げたが、ケース生の事例を、他の事例にそのままあてはめることはできず、目の前にいる子どもとどのようにつないでいくのかを考えることは決して簡単ではない。異なる個性を持つ多様な子どもたちがいるので、一人ひとりの子どもから学び続け、“Aくんと似ているような傾向があるな”“でもちょっとちがうよな”という気付きを日々繰り返して、子ども理解を深めていくという意識を持つことが大切である。また、発達の視点のみで子どもを捉えることは十分でなく、発達の視点をベースにしながらも、生活年齢や障害特性への配慮など多面的に子どもを捉える視点を持ち続けることも重要である。

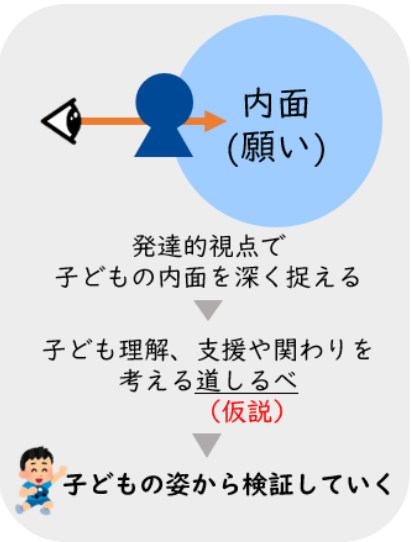


(2) “発達の視点”について

①子ども理解、支援や関わりを考えるために

「(発達の視点により)子どもが見せている姿の奥、根底にある心の動き、モノの感じ方捉え方を知るきっかけができて、子どもへの接し方が変わってくる」「子どもが今持っている力を把握し、どのような支援の仕方働きかけることが成長につながるのかを、教師自身が自信をもつことにつながる」など、子どもの捉え方や支援の考え方が変わったという意見は多かった。発達の視点を学ぶ中で、子どもの内面を深く捉える視点を持つことができるようになり、子どもの課題に応じた支援や関わりを考える手がかりを得ることができた。まさに発達の視点は子ども理解、支援や関わりを考える“道しるべ”になると言える。

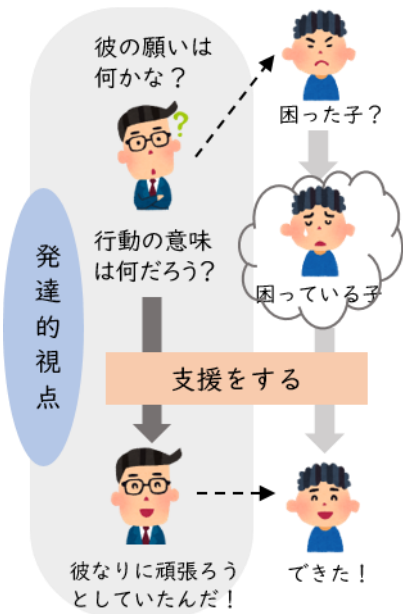
ただし、この“道しるべ”も絶対的なものではなく、“仮説”であるということ意識する必要がある。大切なのは、実際の子どもの姿を通して、この仮説を検証していくことである。実践の中で、仮説を立て、一人ひとりの子どもの見立てや支援を検証し、仮説—検証を繰り返していくことで子どもを見る“目”を鍛えていく必要がある。



②共感的な存在になるために

発達の視点で子どもを捉えることは、外見上に表れている行動の意味を深く理解する視点を教師にもたらす。「普段は困った行動として表れている部分が、発達の見方をすると納得でき、児童のありのままを受け入れ、それならば授業や言葉かけを変えようという発想に持っていける」「一見、困った行動の中にもその子にとって大切な意味が見えてくることがあり、発達の視点を共有することによって、教師間で子どもの行動の示す意味を共感的に受け取れることができる」といった意見があった。他者からみると“困った行動”に見えるが、その行動は子どもの願いや葛藤を内包するものであるという視点をもつことで、教師はその行動をやめさせるのではなく、まずは本人の思いを知ろうという共感的な気持ちを持つことができる。

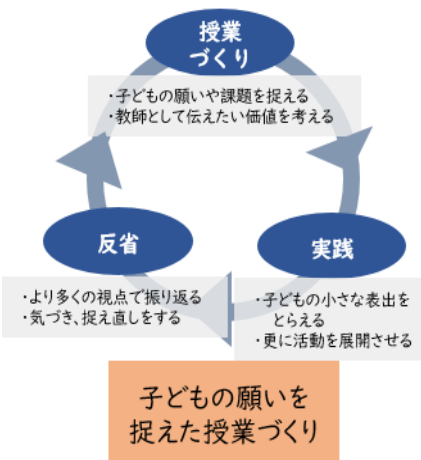
また、今までは気づけなかった小さな表出や行動の中にも、子ども自身は“頑張っている”“できた”と感じていることが捉えられるようになり、「子どもの成長と一緒に喜べるようになる」や「その子どもの“今”を肯定的に捉え、応援したくなる」という意見もあった。発達の視点をもつことで、教師が子どもを信頼することができ、子どもにとってより共感的な存在になり、互いの関係を深めることができる。そして、教師が子どもの育ちや成長を見る“目”を養うことにもつながり、ともに成長を喜び合うことで、教師自身も手応えや喜びを持ちながら実践を進めていくことができると考える。





### ③子どもの願いを捉えた授業づくりのために

発達の視点を通して、子どもの願いを捉えた授業づくりを実践していくことができる。「今、どの段階でどういった経験が必要なのかということを知って授業をすることの重要性を感じた」という意見から、子どもの課題を捉え、それを達成するためにはどのような活動が必要かを考える手がかりとなる。また、授業を振り返り「(子どもたちの中で)ヒットしたものとそうではないものを見極め、次に活かすことができるようになった」という意見もあった。授業力を向上していくためには、“なぜ、この教材、活動が響いたのか”それを発達の視点で振り返り、子どもの姿を捉え直すことが必要である。発達の視点で振り返ることは、すなわち子どもの立場、目線に立つことであり、子どもの願いを捉えることでもある。そして、子どもの願いを知ることによって、教師が実践を通して伝えたい価値観(授業者としての願い)もより深まり、互いの“願い”を擦り合わせていくことによって、より良い授業につなげていくことができる。子どもの願いを捉え、実践を次につないでいくためにも発達の視点は重要になるといえる。



## 【2. 教師間の対話について】

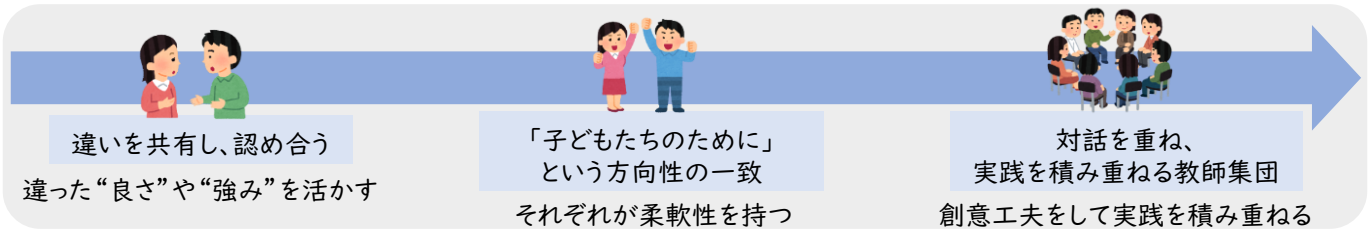
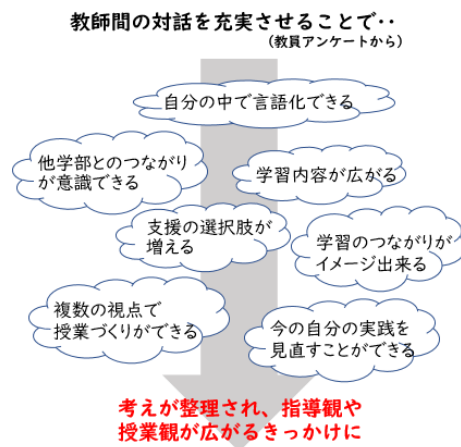
### (1) デザインシートの活用について

デザインシートに関しては「授業づくりの際に、ねらいやアドバイスを振り返りながら、構成のポイントにしていた。実践後もシート一枚にまとまって、すっきりと見やすかった」という意見をはじめ、肯定的なものが多かった。授業の構想段階、そして振り返りについて有効なツールになった。また、アイデアシェアタイムや事後研究会などで活用できたことで、教師間で共通の視点を持ちながら、対話をすすめるきっかけになった。

一方で、改善点も指摘された。「枠に文章を収めることにとどまって、創意工夫のある授業づくりになっているのか検証が必要である」やケース生の項目を作ったことで「“個”に注目するのは大切だが、集団の全体像とのバランスが捉えにくかった」という意見もあった。上記の改善点を踏まえて、シートの項目や様式の検討は必要だが、前提としてこのシートを書き上げることが、授業力の向上に直結すると捉えることはできず、あくまで教師間での対話や授業のアイデアを生み出すツールであるという意識が必要であろう。授業づくりにはデザインシートの項目だけでなく、それ以外にも多様な視点が必要であり、授業力の向上を目指すためには、実践記録を取ることや普段から教師集団で話し込むことなど、自らの実践を内省的に捉え、実践を積み重ねていくという教師集団の意識が重要である。

### (2) “教師間の対話”を重ねて

教師間の対話については、右図のような意見があり、考えが整理され、指導観や授業観を広げることができたといえる。また、「それぞれが考えていることがかなり違うということに気付くきっかけになった。お互いの主張や意見を受け入れ、柔軟に対応できる教師集団にしていきたい」など、教師それぞれの考え方が異なることを改めて認識することができたという意見もあった。教師間において、支援の仕方や指導の方向性を合わせ、一貫性をもった指導も大切であるが、教師それぞれ異なる考えを持ち、違った“良さ”や“強み”をもっているものである。そういった“違い”を共有し、認め合い、一方で根底に“こどもたちのために”という思いで方向性を合わせながら、それぞれが柔軟性を持ち、創意工夫をして実践を積み重ねていくことが大切だと考える。そして、実際の子どもの姿を手がかりにしながら対話を重ね、教師集団として研鑽を重ねていくことが子ども理解や授業力の向上につながると考える。



## 【3. 次年度に向けて】

今年度は、大学の先生の研修会などを柱にして、発達の視点について理解を深め、自らの子ども理解や教育実践に活かしていくことを重点に研究を進めた。発達の視点と実践を結びつけ、さらにそれらを往還させながら、子ども理解を深めていくこと、そして教師間の対話を通して、考えを共有し、教師集団として力量を高めていくことの大切さを再認識した一年になった。来年度は今年度の学びをベースにしながら、本校ならではの実践を積み重ね、発達の視点に基づく授業づくりのあり方について、研究を重ね、発信していきたい。

(文責: 清水研吾)

# 小学部 研究報告

## 発達についての研修会（1～3歳） 講師：白石 恵理子先生

### ◆1歳半（発達の大きな質的転換期）

- ・自分のつもり（目的）を作って行動する。
- ・「～ダ、～ダ」から「～デハナイ～ダ」への転換期
- ・話し言葉の世界に入る（ことば、指差し、視線なども含めて）
- ・自分と他者との関係の中で気持ちを調整する。

### ◆2～3歳

- ・「～シテカラ～スル」（表現・操作における二次元的発展、大きな生活の流れを捉え切り替える）
- ・イメージの広がり遊び（生活再現遊びから、見立て遊び、つもり遊びへの展開）
- ・対比的認識（形容詞の世界の広がり、「できる～できない」といった二分的世界になることも）
- ・自我の形成（自分の世界を拡大しながら、少しずつ他者を受け入れていく）
- ・仲間の中で他者との多様な関係を築く（あこがれ、あこがれられ、ぶつかり、共感、世話やきなど）



## ケース生について 授業実践「生活単元学習」 授業者：久田 広光

### 実態

今回の研究対象の児童は「は組」（5・6年生のクラス）に在籍している。日常的によく使う簡単な言葉でのやりとりはできるが、会話は難しい。また、自分の思いを教師に伝えることは少ない。学習に対して自分でできると感じている活動（図工など）については、自信を持って取り組むことができる。友だち関係については、意識している様子は見られるが、自分から相手に関わろうとする姿は少ない。一方で、1年生に気になる児童がいて見に行く姿があり、今までにはない姿を見せるようになった。

### 授業の様子

粘土や絵の具を使った作品作りの活動に意欲的であった。粘土の活動では大好きな食べ物であるチョコアイスを作り、「いただきます。おいしい!」などと言ってスプーンを口に運ぶなど、食べる素振りを見せた。最寄りの公園までの町探検では、好きな遊具がある期待感や公園までの道を知っていることもあり、自分から先頭を歩くなど意欲的な姿を見せた。

### 発達の視点から取り入れたポイント

ケース生が興味のあることや好きな活動を取り入れることで、教師の指示を受けて行動するのではなく、本人が楽しいと感じて「もう一回。」と自分から繰り返し取り組むような活動にしていきたい。また、自分でやりたいことを自ら選択して決めることができるよう、選択肢を複数用意することも必要と考える。さらに、友だちのことを気にしながらもなかなか自分から関わるのが少ないケース生が、友だちとの関わりを広げるために、友だちと一緒に取り組む場を設定し、友だちと関わる機会を保障したい。

## アイデアシェアタイム



### こんな授業はどうだろう（授業者より）

- ・公園の遊具で遊んだ経験や、おいしいものを食べたことなど、ケース生が自らが経験した楽しかった思い出を作品として表現する。
- ・これまで取り組んできたしっぽ取りや、今後予定しているキャピラ遊びや紙コップロケット、粘土で作るお団子屋の団子の中から、特にケース生が楽しそうに取り組んだと思われるものを選ぶ。
- ・その作品を用いながら、ケース生が気になっている1年生と一緒に遊ぶ場面を設定する。（関わりやすい場の設定）
- ・ケース生が楽しんで活動に取り組んでいるときには、「もう一回したい」という思いを大切に、繰り返し取り組めるようにする。

### こんな意見ももらったよ（参加者より）

- ・粘土を使った活動が好きなので、粘土で食べ物を作るのはどうか。さらに作ったものを誰かにプレゼントをするという設定にはどうか。
  - ・1・2年生時にお店屋さん遊びをしたときに、お客さんとして楽しんでた姿があったので、友だちとの関わりを持つためにお店屋さん遊びがいいのではないかと。
- 白石先生からの助言**
- ・作品づくりだけでなく、他の人と関わる場を保障することは、活動の広がりがあってよい。その設定としてお店屋さんはいいいのではないかと。やりたい活動を友だち同士で一緒に取り組んだり、取り合ったりしても面白い。
  - ・見立て遊びは、ケース生の発達の視点から重要。





# 授業実践 「は組まつりをしよう」

## ◆活動の流れ

- ①は組神輿をかついで廊下に出る。(祭りが始まることをアピール)
- ②他のクラス(い組・ろ組)を招待して来てもらい「は組まつり」を開催する。
- ③魚釣り屋さんをする。
- ④かき氷・アイスクリーム屋さんをする。

## ◆活動の様子

「は組神輿」を担いで「わっしょい、わっしょい。」という掛け声をしながら廊下に出ることで、自分たちで楽しい雰囲気を作ることができた。また、他のクラスの児童が祭りの始まりを知ることができた。

ケース生はお店屋さんで店員役をして、かき氷やアイスクリームを作った。一回目ではお客さん役の児童が来て「いらっしやいませ。」と言うことができた。また好きな児童が注文した際には、かき氷を作り、「どうぞ。」と渡すことができた。アイスクリーム作りでは、隣りでアイスクリームを作っている児童を見て、一緒に色を混ぜて楽しむことができた。二回目では、お客さん役で教室に入りにくい児童がいたが、その児童に対して自分でかき氷を作り、持って行く姿があった。

授業終了後にお客さん役だった児童が店員役をやりたいくなり、ケース生の席に座ろうとしてきた。ケース生は「嫌だな」という思いがあり席を離れた。そのまま活動を終えるかと思っていたが、教室内の手洗い場で少し時間をおいてから気持ちを立て直し、再び店員さんの席に座り一緒にアイスクリームを作り始めていた。

※本授業の教材や子どもの様子は、本校のHP実践ライブラリーに詳しく載せています。是非ご覧ください。



## 事後研究会

- ・教師が授業を通してケース生との関係づくりに努めていたことがよかった。教師が学習の中で一緒に活動に取り組んだことで、ケース生との関係が「指示する人⇄指示される人の関係」ではなく、遊びを共有することができた。
- ・見立て遊びの展開において、児童の自由な関わりを大切に、「ほどよい自由さ」があった。
- ・友だちとの関わりでは、お客さん役の児童をよく見ていた。好きな相手に対する緊張した様子や、割り込んできた相手とは距離感を保ちつつ気持ちを立て直す様子が見られるなど、一人ひとりとの間で関係を築いていた。
- ・活動の中にケース生の居場所を作りつつ、他児と多様に関わることができる場の設定をすることで、ケース生が安心感を持ちながら活動に向かうことができた。
- ・授業後の自由時間内での遊びを保障したことで、活動の余韻を楽しむことができた。
- ・白石先生の講評があることで、単なる様子の共有ではなく、どう分析するのかという発達の視点に結びつけることができた。
- ・学習場面において、児童が楽しそうで主体的な姿が見られた。祭りやお店屋さんという設定や、神輿やかき氷などの教材、教師の関わり方の工夫が、授業の楽しい雰囲気づくりにつながった。
- ・ケース生の様子から、人と関わることの楽しさに気づき、期待している場面が見られて、成長を実感した。信頼している大人が楽しんでいるからこそ、授業の中で多少の不安があっても、楽しめるということが分かった。

## 研究のまとめ (成果と課題)

発達に関する研修を受け、授業の計画、振り返りに関して教員同士が話し合えたことは意義があった。特にアイデアシェアタイムでは、教員同士の話し合いに白石先生の助言があることで、授業者はより発達の視点を加えることができた。具体的には、お店屋さん遊びを取り入れることで、ケース生がイメージを持って活動に取り組めたこと、また友だちとの関わりを設定された無理のない範囲で取り組めたことである。今回の授業は、ケース生にとって友だちと関わるよい機会となった。その後、ケース生がクラス内で友だちを意識する姿が見られるなど、学習以外の場でも成長した姿が見られた。

事後研究会で、二学期にもう一度取り組んでほしいという意見があり、クラスで祭りの計画をした。祭りに向けて作品づくりをして、二度目の「は組まつり」を開催した。ケース生は活動の見通しが持てていることもあり、隣りに教師がいなくても注文されたものを一人で作り、自分から「いらっしやい。」「どうぞ。」と伝えることができた。これは話し合いの成果と考える。

学部研究の課題として、アイデアシェアタイムを重ねるうちに、授業者からの提案の中に発達の視点が薄くなっていったのではないかと意見があった。また学部の教育実践向上のために、事後研究会での話し合いの時間をもう少し保障できないかという意見もあった。これらの意見を受けて、次年度の研究の進め方を検討したい。(文責:徳永 孝司)

# 中学部 研究報告

## 発達についての研修会（4～6歳） 講師：松島 明日香先生

- ・“他者にとってどうか”という他律的自己調整から、“自分にとってどうか”という自律的自己調整へとかわっていくことが、4歳頃の発達の特徴として挙げられる。
- ・自制心が形成される時期であり、自分の“内の世界（願いや思いなど）”と“外の世界（相手の気持ち、場や状況など）”の調和が図られる。その際、葛藤したり気持ちが揺れたりする時間を十分に保障することが大切であり、自分の中で納得して気持ちに折り合いをつける力を育てていく。また、友だちや仲間をくぐった自己信頼の高まりの中で形成される自制心こそが大切である。
- ・仲間関係の中で自分が認められているかどうかが大変なカギとなるため、「できるーできない」の二分的評価に留まらず、肯定的な感情を取り入れることのできる活動や評価の工夫が求められる。
- ・5歳以降には、対比的な認識をしていた二つの世界の中に、“ちょっと”“だんだん”“ふつう”などのもう一つの世界を作るようになる。自己や他者を多面的に理解するようになり自己客観視)、自身や他者の捉え方に深みが出てくるようになる。



## ケース生について 授業実践「国語」 授業者：河原林 毅



実態

CMや車内アナウンスなどの聴覚からの情報が記憶に残りやすいため、言葉はよく知ってはいるが、意味まで捉えきれないことが多い。自己選択、自己決定が苦手であり、自分の思いや要求等を言葉で伝えたり表したりすることも難しい。パターンの言葉のやりとりや関わりを好み、自ら友だちや教師に要求して楽しむことができるが、一方的であることが多い。また、やりとりのきっかけとなる話題も次々とかわり、一つの物事にじっくりと向かいにくい傾向にある。憧れの友だちに対して、“一緒に〇〇したい”という思いが膨らんできているが、相手の気持ちを考えることが難しく、思いが叶わない時には気持ちが崩れ、折り合いをつけることが難しい。

授業の様子

興味をもてる活動には偏りがあり、見通しがもてない活動やかたやボウリングなどルール性のある活動に気持ちを向けることが難しい。活動に自信がない時には、うつむいたりその場から離れようとしたりする。一方で、お決まりのセリフやメロディがあるわかりやすい展開の活動には安心感をもち、繰り広げられる決まった言葉のやりとりを期待したり楽しんだりするなど、意欲的に取り組むことができた。また、そういった活動を通して、楽しかった思いを自分なりの言葉で伝えることもあった。

取り入れた視点から発達の観点から

枠にあてはめるのではなく、“自分はどうしたいのか”という気持ちをもって、主体的に自分で行動を選択できたり自分を表現したりすることができる自由度のある枠組みをもとに、安心して取り組める活動を設定する。自分や活動にじっくり向き合い、葛藤する時間を十分に保障し、自分で考えたり決めたりする場面を大切にする。また、自分の表現や選択が仲間にも認められる場を設定し、互いに認め合うことを通して、肯定的な感情を味わい、自己信頼を高められるようにするとともに、活動への手ごたえや次への意欲がもてるようにしたい。

## アイデアシェアタイム



### こんな授業はどうだろう（授業者より）

「笑点タイム」

- ・「笑点」が以前から好きなケース生。自分なりのイメージをもち、座布団を使って「笑点」ごっこを教師と楽しむことがあった。このような様子から好きなものを通して、表現できる機会を作りたい。
- ・活動を通して、教師や友だちとの会話や、やりとりを広げていけるのではないかと考えた。
- ・〇×がない「笑点」という枠組みの中で、安心して自分の思いを表現し、認めてもらえる場にしたい。
- ・様々なお題をきっかけに、自由なやりとりを通して生徒たちの興味関心を探ったり、“楽しい”と思える経験を積み重ねたりしていきたい。

### こんな意見をもらったよ（参加者より）

- ・生徒たちが「笑点」のイメージをどれほどもっているか。まずは、「笑点」のイメージや笑点のもつ面白さを共有する必要があるのでは？
- ・「笑点」を連想させる場面設定（衣装、座布団、音楽など）をすることで、自ら“やってみよう”とする意欲につながるのではないかと。
- ・「笑点」が好きなケース生だけでなく、どの生徒も楽しみながら自分らしさを表現できる活動や展開を考える必要がある。
- ・自由な表現を大切にするために、その子なりの表現を認め合える雰囲気の中で、気持ちを向け続けられるような展開をどのようにするか。





# 授業実践 「笑点タイムで楽しく話そう！」

## ◆活動の流れ

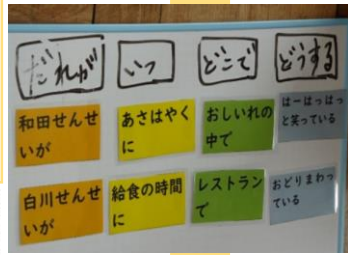
「笑点」をテーマに様々なお題を設定し、友だちや教師とのやりとりや会話を通して、楽しみながら豊かに表現したり、様々な表現方法を学んだりする。

- ① 「笑点」のテーマソングにあわせて場面作りをする。
- ② 「○○といえぱ?」、「好きな○○」シリーズ、バラバラ作文作り（「だれが・いつ・どこで・どうした」の様々なカードを選び取り、オリジナルの文章作りをする）
- ③ 「笑点」のテーマソングにあわせて使用した物を片付け、活動を終える。

## ◆活動の様子

- ・初めに「笑点」を全員で視聴したことで、共通のイメージをもって取り組むことができた。
- ・テーマソングや「パフ」の効果音、はっぴや座布団などを使用して「笑点」を思わせる場面設定することで、初回から“やってみよう”という気持ちをもって取り組むことができた。授業を重ねる中で、テーマ曲が流れると、「今日のおだいはなに?」と活動への期待感を膨らませながら、生徒たちで活動の準備をするようになった。
- ・初めに「好きなおやつは?」など、ケース生が答えやすい質問を設定することで、「グミです。ブドウ味が好きだからです。」と、教師とのやりとりを通して自分の言葉で伝えることができた。
- ・バラバラ作文作りでは、初めはカードの内容をあまり確認せずに選んでいた。しかし、できあがる文に面白さを感じられるようになると、「うーん。」と考えたり、文を見直して[どうする]の部分のカードを選び直したりして、よりおもしろいと思う文にして堂々と発表することができた。

※本授業の教材や子どもの様子は、本校のHP実践ライブラリーに詳しく載せています。是非ご覧ください。



## 事後研究会

- ・見立て遊び的な要素がある「笑点」のメンバーになりきる体験を通して、舞台上の主役になることに手ごたえや楽しみがもてる発達段階の生徒たちならではの様子であった。
- ・「笑点」というテーマ（自由度のある枠組み）には、正しい答えや望ましい答えだけが求められない良さがあった。自分のできなさや失敗でさえも、ユーモアとして捉えられる魅力があり、自分の表現として発表できる場になったことで、豊かに表現することができた。教師や友だちが「おもしろい!」などと肯定的に反応（評価）することで、手ごたえや喜びをもつことができた。また、友だちが答えた際にズッコケを見せ、教師や友だちからのツッコミを期待して楽しむなどのやりとりにも発展した。
- ・バラバラ作文では、お決まりのパターンであることに安心感ももっていた。そして、カードを選んで文を作るという仕組みのわかりやすさと、カードの内容が“おもしろそう”と思えるものであったことが、自分の表現として“伝えたい”気持ちへとつながったことで、楽しみながら取り組むことができた。繰り返し取り組む中で、さらに思いが膨らみ、「こんなカードがほしい!」と生徒がリクエストする姿があり、次への期待や意欲へとつながった。
- ・友だちの表現を聞いたり見たりする際には、言葉の意味を十分に理解できるようにするための工夫が必要である。また、自分の表現を友だちと共有し、共感してもらうことで、“つぎは…!”とさらに思いを拡大させていけるような活動の工夫や展開を今後どのようにしていくのか。

## 研究のまとめ（成果と課題）

今年度、中学部ではケース生の様々な学習での様子を検証するため、年間を通して家庭科、国語科、美術科の順に授業研究を進めた。以前から意欲的な家庭科の調理活動では、作って食べるという見通しのわかりやすさ、食べることへの期待や楽しみに加え、材料の切り方や盛り付けの仕方などを自分で考え、選択できるよう設定した。それにより“こうしよう”という自分の思いや意欲を引き出すことができた。国語科では、自由度のある枠組みの中で、自ら選択したことを表現し、友だちや教師と肯定的に認め合うことを通して、“もっとこうしたい”という思いを膨らませることができた。こうしたケース生の様子を踏まえ、美術科では10枚の発泡スチロールに色を塗り、スチロールカッターでこぼこに切ったものを積み重ねてタワーを作る「スチロールタワーを作ろう」を設定した。見通しがもてた上で、好きな色を選んで塗り、ケース生が扱いやすいスチロールカッターを使用したことで思うように切ることができ、歌って楽しみながら長時間活動に向き合い、自分らしく表現することができた。鑑賞活動では、自分のこだわりポイント（好きな青色、恐竜みたいな形）を発信することができた。また、友だちの作品と比べることで、作品を作ったことへの手ごたえを感じ、“次はこうしたい”という意欲をもつことができた。このように、発達の視点を踏まえてケース生の様子を捉え、横断的に授業実践を行うことを通して、ケース生の多面的な理解へとつなげることができた。また、授業づくりのポイントや具体的な手立てなど、次の実践への足がかりとなる学びを教師間で共有することができた。さらに、本研究で得た発達の視点をもとにした理解は、日々の関わり方にも活かすことができ、教師集団の共通理解として確立したことで、学部内で指導や手立ての方向性の足並みを揃えていくことにもつながった。

引き続き、今年度得た学びをもとに、それぞれの発達段階と発達の道筋を捉えることを通して生徒理解を深めていくとともに、教師間の対話の充実と汎化を図りながら、発達の視点を踏まえた更なる実践へとつなげたい。（文責：炭竈 雄一郎）

# 高等部 研究報告

## 発達についての研修会（7歳～） 講師：白石 恵理子先生

- ・時間的認識・空間認識の広がり逆をとらえる力（見通しや段取り、逆算）が身についてくる。計画的ではないが、徐々に「帳尻合わせ」ができてはじめる。
- ・話を聞いてもらいながら、語りたことをはっきりさせていく文脈形成力が高まり、不特定多数の相手に対しても何をどう伝えたいのか相手に応じた説明もできてはじめる。
- ・他者の価値観を一方的に受け入れたり、自らの価値観に固執しやすい時期で、行動規範、価値規範ができていくが、他者との調整や複数の価値観の調整はまだ難しい。
- ・強い価値観に巻き込まれやすい時期だからこそ、対等な仲間関係の中で教え教えられる関係や「ほんま？ それでいいの？」と考えられる力と仲間集団が大切になる。
- ・自分の頑張りを意味づけしてくれる大人や友だちがいるかどうか大切な時期であり、自己肯定感のベースとなる。経験していないことをイメージしにくく、未来への希望と不安が生じやすい。



## ケース生について

## 授業実践「美術」 授業者：今咲 美香



実態

みんなと一緒に話に入ってしゃべりたい思いが強く、どんな話題にも入ってくる。友だちの様子を見て「上手だなあ。」と感動することがある。しかし友だちと話をしている時は制作の手は止まり、あまり進まない。細かい作業は苦手で、ボンドも出しすぎか、出せないかの両極端である。好きなもの（電車）や、自信のある活動（書写）を制作に取り入れると意欲的に取り組める。

授業者の様子

自分の好きな物（電車）を取り入れた作品作りのとき、友だちから「電車すごいね。」「おもしろいね。」と言われると「好きなのでうまくできました!」とやる気をもって制作できた。紙を小さく切る、粘土をちぎる、紐を結ぶなど、細かい作業が苦手である。自分が苦手そうと感じた時は、始める前から「できません。」ということがあったが、教師が見本を見せる支援があると頑張ることができる。作業を始めるまで時間がかかるが、片付けは早く、丁寧にすることができる。わからないときや困ったときには自分から確認できるが、自分で判断して制作にあたるのが難しい。

発達視点から取り入れたポイント

単元を通じて、仲間とともに作品を協力して作り上げる喜びを感じさせたい。さらに一人ひとりの生徒の多様な興味関心を引き出しながら、誰もが活躍できる機会、仲間から認められる機会をつくっていききたい。活動の中で、試行錯誤や葛藤しながら新しいことに挑戦したり、仲間とアイデアを共有したりしていくことができるように教師が支援し、さらに活動を広げていきたい。自分が工夫したところやお気に入りのポイントを出し合い、今後どうしていきたいかを生徒同士で話し合いができるようにしたい。

## アイデアシェアタイム



### こんな授業はどうだろう（授業者より）

#### 洗濯ばさみアート

- ・洗濯ばさみの様々な結び方を試させたい。繋げる練習をしてから立体を作らせたい。
- ・プラレールが好きなので、つないでいくところなど、似ていて楽しくやってくれる気がする。
- ・巧緻性に差が出ず、引け目を感じたり明らかな失敗はなさそうである。



### こんな意見をももらったよ（参加者より）

- ・友だち同士で影響し合えそう。
- ・自分のやったことをみんなが受け入れてくれることで、表現の面白さに気付いたり、自分からとりかかったりすることにつながっていくのではないかな。
- ・皆で作るテーマを決めて作っていく。他の人とのつながりが感じられるのではないかな。
- ・一人で作りたい生徒もいるのではないかな。
- ・写真撮影会を設定して、自分がいいなと思った角度で写真を撮るのもおもしろいかもしれない。
- ・洗濯ばさみがこんなにたくさんあるんだという量が大事。
- ・黙々と創作している姿、友だちの作品を参考にしている姿があるとすばらしい。
- ・地上に立てるのが難しいので上から吊り下げてはどうか。





# 授業実践 「洗濯ばさみの世界」

## ◆ 活動の流れ

- ①洗濯ばさみアートの作品を知り、個人で作品作りをする。
  - ・洗濯ばさみを並べたり、繋げたりしてみよう。(何に見えるかな? [空想の生き物? ロボット? 建物? 夢の電車?])
  - ・授業後半でベストショットを1枚撮り、自分の作品の紹介や説明をする。
- ②前回個人が作った作品を利用し、共同作品を作っていく。
  - ・様々な洗濯ばさみアートを見る。
  - ・前回作ったものを生かして、洗濯ばさみの世界を作る。→「洗濯ばさみのまちをつくろう」
  - ・友だちの表現の良さや自分との違いを感じ、自分の活動にも取り入れるなど工夫して、お互いを認め合える活動をする。

## ◆活動の様子

- ・作品を見た友だちから「すごい!」という声があがり、みんなから認められ、仲間とともに「まち」を協力して作り上げた喜びを感じられた。
- ・好きなプラレールと似ていることがわかり、「こういう活動は得意です。家でもやっているの。」と言い、自信をもって制作活動ができた。
- ・洗濯ばさみを繋げることでプラレールの線路のようになることがわかり、線路のルートを考え取り組む様子が見られた。
- ・“高架を作りたい” “まっすぐの線路にしたい” など気持ちが膨らみ、作り方を教師に相談し、作ることができた。試行錯誤しながら作ろうとチャレンジする姿が見られた。
- ・“作品同士を線路でつなげたい”という友だちの意見を聞いてさらに意欲が持てた。



## 事後研究会

※本授業の教材や子どもの様子は、本校のHP実践ライブラリーに詳しく載せています。是非ご覧ください。



- ・大量の洗濯ばさみとの印象的な出会いが、驚きやこれからすることへの期待感を高め、グループ全体で創作活動し、取り組んでいこうとする雰囲気につながった。また身近な物の意外な使い方から美術の表現方法の幅の広さを知り、自由と制約のある素材(どんな繋ぎ方をしても良いことや、洗濯ばさみ自体の形は変えられないなど)で工夫しやすく、手ごたえのある教材であった。
- ・作っている新幹線の高架を見て、「おー、つながってきました!」と嬉しそうに話し“もっとこうしたい”と次の展開を期待する様子や会話も見られた。「まち」という表現は、それぞれ多少のイメージの違いはあれど、今までの生活経験からそこには電車が走り、動物園があり、多くの共通認識を持っているという言葉である。「まちをつくろう」という授業者の言葉かけが、生徒のイメージを広げるきっかけになり、それぞれの作品を包み込む主題設定にもつながっていた。
- ・生徒同士で話し込み、「まち」をイメージして“アレも作りたい” “コレも作ろう”とアイデアが出て“早く作りたい”とウズウズしてくるような場面があってもよかった。この学習展開では、個で没頭しながらも相手を意識したり協力できたりしていたので、この点が惜まれる。
- ・「工事します。」と言って高架を作ったり、観覧車を作った生徒の「〇〇先生と乗るの。」という表現は、個別にやっているのではなく、みんなでやっているという感覚であり、こういった経験を重ねていくことが大切である。
- ・それぞれの個人の作品がまちという一つの作品になったり、お互いの感想を共有したりと友だちを意識できる授業だった。生徒の声や作品によって展開された授業で先生が臨機応変に工夫しながらされていたのがよくわかった。

## 研究のまとめ (成果と課題)

この時期は、自らの価値観に固執しやすい時期ではあるが、自分の考えを聞いてもらいながら別の価値観を受け入れていく時期でもある。授業の中で、教師との「何を作っているの?」や「すごい!〇〇にも見えるね。△△にも見えるよ。」などのやりとりが、生徒各々が作品作りに没頭しながらイメージを膨らませ、作りたい物を変化させながら、創作意欲を高めることにつながった。さらに個々で「遊園地」や「動物園」を作っていた生徒たちが、電車の線路で「遊園地」と「動物園」をつなげてほしいと要求され、ケース生は「分かりました!」と、とてもうれしそうに返事していた。これは集団が、個々の作品で終わるのではなく、「まち」というみんなでひとつの作品にしたいという願いや発想が芽生えた瞬間でもあった。

ケース生は、自分の考えに固執する一面を持ちつつも、友だちのことを気遣ったり、自分から友だちを求めたりする姿が増えてきた。発達に関する研修会で学んだことをもとに、個の思いを大事にしつつ、周りに関われる授業展開をめざして、個と集団を行き来させる環境設定や対話を大事にしてきた。すると生徒たちは計画的ではないが、生徒同士で思いのつながる瞬間や、自分のやっていることが仲間の中で認められる実感をもつことができた。

集団で活動する安心感や期待感、仲間とのやりとりの中で、自分の感じ方や見方、物への向かい方や関わり方が深まり、発展していく感覚が感じられるような授業づくりを今後も目指していきたい。(文責 武田義弘)



## 実践ライブラリー（本校HP）の紹介

今年度行った研究授業を中心に、簡単な単元計画、授業のポイント、子ども達の反応などを1枚のシートにまとめて「実践ライブラリー」としてHP上に公開しています。

『インターネットで検索しても、発達年齢に合わない…』『一時間の授業ではなく、単元での流れが知りたい!』など、お困りの方はおられませんか?今回の年報では紹介できなかったことを、発達年齢別に掲載しています。みなさんの授業に少しでもお役に立てれば幸いです。

ぜひ一度、ホームページをご覧ください、ご活用ください。



## 研究同人

校長 辻延浩 副校長 木村政秀  
研究主任 清水研吾 副主任 河原林毅

### 【小学部グループ】

☆徳永孝司 森あゆみ 小松未央 清水研吾 志賀元紀  
水野佑夏里 大坪英里 久田広光 木村明子

### 【中学部グループ】

☆炭竈雄一郎 石部和人 須田ひとみ 河原林毅 和田佑子  
寺田慧 谷智代 白川恵里奈 山本祐美 辻延浩

### 【高等部グループ】

☆武田義弘 成田豊 堀口毅 山下桃子 下紺晃季 辻川皓輔  
今咲美香 山本顕典 巻幡知栄 福谷芳恵 木村政秀

○研究協力 滋賀大学教育学部障害児教育コース

小学部グループ助言：白石恵理子 教授

中学部グループ助言：江原寛昭 教授 松島明日香 准教授

高等部グループ助言：窪田知子 教授 羽山裕子 准教授

(☆印=チーフ)

次年度に研究発表大会を行います。

**令和5年12月9日(土)現地開催**  
で実施を予定しています。

一次案内は6月ごろを予定しています。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。



滋賀大学 公式キャラクター  
「カモンちゃん」

## 編集後記

今年度の研究のポイントは、「発達の視点」を子どもの願いをとらえる大切な手がかりとして、子ども理解を深めることと授業づくりに活かしていくことです。「発達の視点」については、滋賀大学障害児教育コースの先生方にご指導をいただき、学びを深めてまいりました。また、授業実践に関わる研究協議にも常に参加していただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたっては、研究当初に神戸大学大学院准教授 赤木和重先生より研究の方向性についてご示唆・ご指導いただく機会をもちました。「逸脱」に注目すると子ども理解・授業づくりが豊かになる可能性があること、今日の「逸脱」を同僚と共有し、次のアイデアを創造することの大切さを学びました。私共の研究に多くの方々にご指導をいただきましたことに対しまして厚く御礼申し上げます。

今後も教職員一同努力し、学び続けていきたいと思っております。本研究は道半ばであり、今後とも各方面から、引き続きご指導いただきますようお願い申し上げます。

令和5年(2023年)3月  
滋賀大学教育学部附属特別支援学校 副校長 木村政秀

編集・発行 滋賀大学教育学部附属特別支援学校

〒520-0002 滋賀県大津市際川3丁目9-1

発行日 令和5年3月1日

印刷所 社会福祉法人 いしづみ会

〒520-0027 滋賀県大津市錦織2丁目9-28